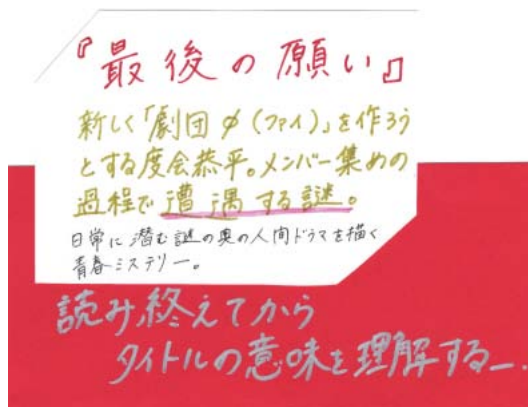
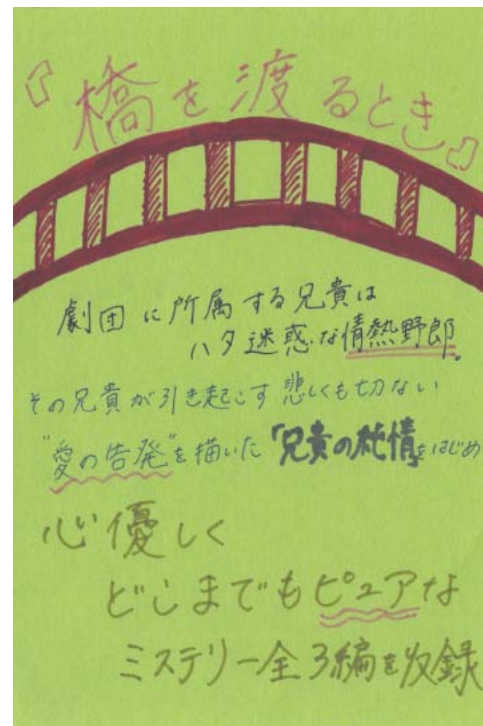
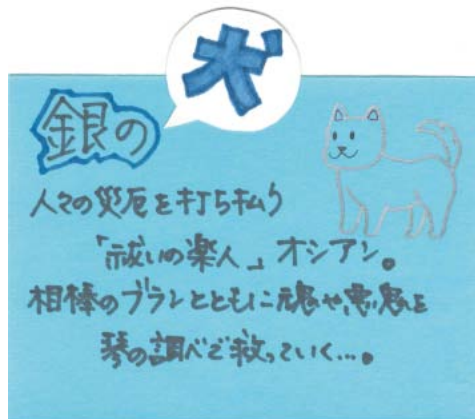
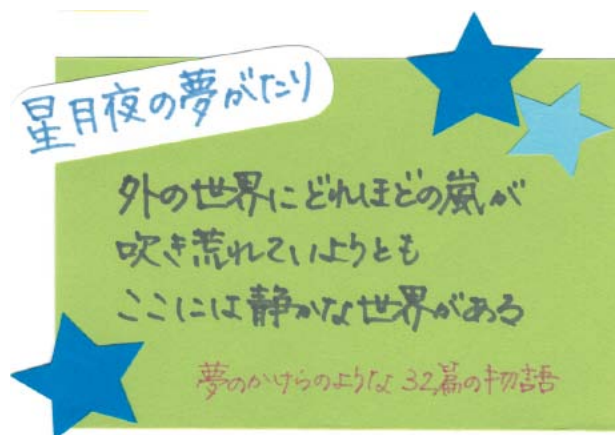
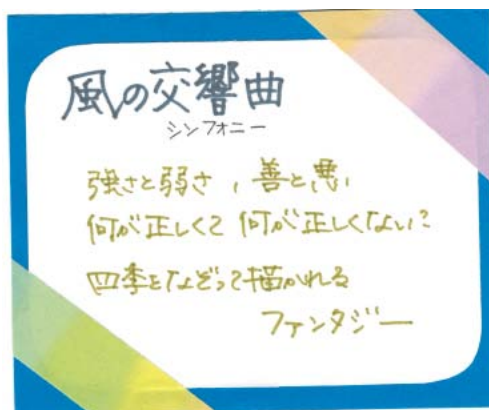


光原百合先生 追悼展示について

長年、本学の地域活動に貢献し、尾道市立大学地域総合センター員を務められた日本文学科教授光原百合先生が、令和4年8月24日にご逝去されました。

光原先生への追悼と感謝を込めて、日本文学科の学生有志が主体となり、附属図書館一階雑誌閲覧室・C棟一階ロビーにおいて、追悼展示「～追悼の意を込めて～光原百合先生作品展示」を開催しました（令和4年10月18日～29日）。

図書館雑誌閲覧室では、光原先生の著作のうち、本学図書館所蔵作品および個人所有の作品を収集し、展示を行いました。展示では、学生によるポップが、光原先生のこれまでの著作を彩りました。



ポップ提供：日高わかな、原田琴未（日本文学科学生）

C棟1Fロビーの展示では、「光原先生と地域との関わり」、「光原先生の怪談への関心」、「光原先生の文芸創作の考え方」、「『翠幻地』からみえる光原先生」、「光原先生の英語教育の考え方」の五つのテーマで資料が展示されました。日本文学科教員や地域総合センターも協力し、光原先生が担当された公開講座やイベント、怪談や文芸創作への思いなどを集めた資料を作成、展示しました。



尾道市立大学附属図書館展示



尾道市立大学C棟展示

講座シリーズ回数	講座	年度	講座タイトル
第21回	尾道短期大学公開講座	平成9	シャロック・ホームズとその末裔たち
第1回	尾道大学公開講座	平成13	「指輪物語」の世界
第1回	尾道学講座	平成18	尾道創作民話の取り組みについて
第2回	尾道文学談話会	平成22	尾道の風土と『尾道草紙』
第4回	尾道文学談話会	平成23	光原百合『星月夜の夢がたり』を読む
第5回	尾道文学談話会	平成24	小説のさまざまな結末について
第6回	尾道文学談話会	平成25	リドルストーリーについて
第7回	尾道文学談話会	平成26	尾道で怪談を書く
—	公開講座	平成27	哲学/文学セッション
—	公開講座	平成27	哲学/文学セッション「桜絵師」
—	公開講座	平成27	哲学/文学セッション「旅の編み人」
—	公開講座	平成27	哲学/文学セッション「写画家」
第8回	尾道文学談話会	平成27	ラフカディオ・ハーンから小泉八雲へ
—	公開講座	平成27	哲学/文学セッション「ピアニッシモより小さな祈り」
第4回	尾道市立大学公開講座	平成28	尾道でのひら怪談について
第10回	尾道文学談話会	平成29	尾道でのひら怪談の魅力
第5回	尾道市立大学公開講座	平成29	尾道の土地柄と怪談
第11回	尾道文学談話会	平成30	『おのみち怪談』を読む
第6回	尾道市立大学公開講座	平成30	尾道本でビブリアオバトル!
第12回	尾道文学談話会	平成31	ミステリーの魅力とは or 怪談の魅力とは
第8回	尾道市立大学公開講座	令和3	小泉八雲「飴を買う女」と、尾道の「丹花の飴買い幽霊」

光原先生 講座一覧

担当：原優花
藤井佐美
藤本真理子
協力：地域総合センター

光原先生の 考える「怪談の アイデンティ ティ」とは？

「怪談の魅力について」、『尾道文学談話会会報』5、2014、尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、pp. 37-43

〈怖いだけでは怪談とは呼べない〉、それでは怖いだけではない、怪談を怪談たらしめる要素、怪談のアイデンティティとは何なのでしょう？

筆者自身は怪談を、怖いと同時に一種の「哀惜の念」を覚えさせる物語と考えています。怪談の多くに、亡き人の霊やもう失われたもの、失われつつあるものが登場するからでしょうか。

『指輪物語』『すみっこぐらし』『相棒』etc.
←好んで紹介された作品やキャラクターたち。
過去の設定がある??

「怪談」から 地域へという 意識

「怪談の魅力について」、『尾道文学談話会会報』5、2014、尾道市立大学芸術文化学部日本文学科、pp. 37-43

もともと怪談は、地域に根差して長く語り伝えられたものも多く、その点「民話」と共通して、地域文化と深く関わると考えていいでしょう。

小泉凡氏による「怪談＝地域文化」の考え方等にもとづく。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）とかかわりの深い島根県や怪談への関心ともつながる。

「ふるさと怪談トークライブ」や「てのひら怪談作品募集」、地域の講演にそれぞれつながっていく。

てのひら怪談の いきさつ

—尾道に怪談を—



「尾道てのひら怪談について」、
『尾道市立大学地域総合センター
叢書』9、2017、尾道市立大学
地域総合センター、pp.61-63

それら（他地域での企画）の流れを受け、尾道という土地にも怪談が似合うと筆者は考えた。尾道は風光明媚で歴史も古く、人々の町への愛着も強い。また旧市街には寺社が多く、この世とあの世が仲良く隣接しているような雰囲気を残している。尾道を舞台とした魅力的な怪談が新たに生まれれば、尾道の新たな魅力にもつながることだろう。

すべては今回の結果次第であるが、可能であれば「尾道てのひら怪談」も大阪のように、今後とも継続させていきたい。

文芸創作の 視点



「文芸創作 この十年」、『尾道市立大学日本文学論叢』9、2013、尾道市立大学日本文学会、pp. 3-6

文芸創作で培った文章力は、社会人になってからも必ず役立つし、それ以上に、自分の中にある世界を表現する方法を知っておくことは、人生のいずれかの局面で自分を救ってくれることがある。

- 若者たちが描きたい世界は、（この）十年くらいではまだ大きく変わらないのかもしれない。
- （しかし、）作品の登場人物に地味なリアリティよりも鮮烈な存在感を求める傾向はあると思う。

背景に〈エンターテインメント性の豊かさ〉を見る。

展示によせて……センター職員より

光原先生と初めて出会ったのは、私が学生の頃でした。光原先生の著作を読んで、当時書いていた読書ノートに「同郷だ！いつか尾道で光原百合に会えたりしないかなあ」（原文ママ）などと、のんきにしていたためていました。

そんなこともすっかり忘れていた20年後、私は尾道市立大学で働くこととなり、そして光原先生とお会いすることが叶い、夢はまさに現実のものとなりました。ずっと昔から先生の本を読んでいたり、好きな推理小説・怪談の話をしたこと、公開講座のあと家までお送りしたこと、私の名前を呼んでくれて、いつもありがとうと言ってもらえたこと……私はいつも信じられない現実の頬が緩んでいました。「夢は必ず叶う」などと、大きなことは言えませんが、光原先生にお会いすることで、本当に叶うこともあるんだと身に染みて感じさせてもらえました。

今でもふと、地域総合センターのドアをノックして、いつものように顔を見せてくれるのではないかと……と思っています。

光原先生、どうもありがとうございました。出会うことができ、本当に嬉しかったです。

地域総合センター職員 高垣美晴

地域総合センター員一同、心よりご冥福をお祈りいたします。

※追悼展示の展示資料を掲載しています。

尾道市立大学 日本文学科発行の「尾道文学談話会会報第13号」に同様の内容のものが収められています。